PDF version

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット　ニュースレター

第28号　2002年5月8日（水）
発　行：歴史資料ネットワーク
（神戸大学文学部内）
TEL/FAX　078-803-5565
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/welcome.html
Mail: s-net@lit.kobe-u.ac.jp（アドレスが変わりました）

■□■□■□■□■■□■□■□■□■■□　目次　■□■□■□■□■■□■□■□■□■■□■

◎歴史資料ネットワークより：会員加入・サポーター参加のお願い…p1 ／総会告知…p2
◎震災復興・市民講座：第１回講座告知…p3
◎「阪神・淡路大震災の資料保存と記録化に関する研究会」（深見貴成／山本唯人）…p４
◎阪神・淡路大震災震災記念協会見学会（佐賀朝／森下徹）…p６～
◎富松城跡学習会（善見壽男／山上雅弘）…p７
◎被災・保全史料「尼崎公害患者・家族の会史料」本格整理はじまる…p10

■□■

◎歴史資料ネットワークより

前号ニュースレターでお知らせしましたように、歴史資料ネットワークは、阪神・淡路大震災以来の活動実績をふまえ、被災地・阪神地域に根ざしたボランティア団体として、史料ネットの取り組みを持続的継続的に発展させていくことを目的に、今月26日（日）の総会をもって改組を迎えます。

私たちはこの改組を、新たな、そして大きなステップと認識し、今後は、被災史料・文化財保全の取り組みにおける全国的なセンターとしての一定の役割も視野に入れた組織として、歴史資料ネットワークを飛躍させていく所存です。つきましては、皆さまのさらなるご協力・ご理解、そしてご意見をいただきたく、会員加入・サポーター参加、及び総会について、以下にお知らせ致します。

歴史資料ネットワークへの会員加入・サポーター参加のお願い

歴史資料ネットワークは、1995年２月４日、関西に拠点を置く大阪歴史学会、日本史研究会、大阪歴史科学協議会、京都民科歴史部会、神戸大学史学研究会、神戸女子大史学会などの歴史学会を中心に、阪神大震災で被災した歴史資料保全のために歴史資料保全情報ネットワークとして開設され（1996年４月に歴史資料ネットワークと改称）、若手を中心に大学教員や院生・学生、史料保存機関職員、地域の歴史研究者などがボランティアとして参加する団体で、神戸大学文学部内に事務局を置いています。

歴史資料ネットワークは、被災市町村や兵庫県の協力を得て、1995年から３年間、のべ800人のボランティアを組織し、被災地を巡回調査しながら、文献資料等段ボール箱1500箱に及ぶ近世から現代に及ぶ貴重な歴史資料を被災地で救出しました。2000年からは、神戸市文書館と協力し、長田区駒ヶ林地区、西代地区などの震災後の総合史料調査をすすめています。

また被災地の歴史文化全体の復興を重視し、関係団体と協力し「歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム」を二度にわたって開催、文献資料だけでなく、石造文化財や埋蔵文化財の保全にも尽力しました。被災地の市民を励まし、復興における歴史文化の持つ意義について理解を得るため「歴史と

文化を考える市民講座」を 95 年から、98 年まで８回に渡って被災自治体の共催もしくは後援、および兵庫県の後援のもと巡回して開催しました。さらに東灘区森地区でのミニ市民講演会、兵庫津連続市民講演会を開催し、地域住民の歴史文化を発展させるさまざまな動きを援助してきました。

一方、震災そのものを記録保存するために、21 世紀ひようご創造協会、阪神・淡路大震災記念協会、県文書課や、神戸市文書館、県内の公立図書館や市民団体などに積極的に働きかけ、相互の調整をはかるとともに、保存のあり方について具体的な提言をおこなっています。

また、1999 年 10 月の台湾大震災では現地を訪問、阪神・淡路大震災の経験を伝えました。さらに 2000 年 10 月の鳥取県西部地震、2001 年３月の芸予地震では、経験を伝えるのみでなく、阪神・淡路の被災地から多くのボランティアを派遣しました。

歴史資料ネットワークは、来年度から、学会会員と個人会員による組織へ移行し、さらに市民の皆様に活動の支援を呼びかけ、個人会員やサポーターになっていただくことをお願いすることになりました。活動の維持発展のために、人的に連絡を緊密にし、財政を支えるための改組です。これにより、広範な歴史学会と様々な市民が持続的に協力しながら、歴史資料保全と社会におけるその活用を実践的に進めていくという、その基本的な性格を維持発展させていきます。

改組後の基本的な活動内容は次の６点です。

① 阪神・淡路大震災後の保全歴史資料の保存と活用
② 阪神・淡路大震災の資料・記録の保存と活用
③ 被災地を中心とする市民の歴史研究活動の援助
④ 大規模自然災害についての史料保全・歴史研究についての提言
⑤ 大規模自然災害の際の歴史学会の史料保全活動の暫定的なセンター的役割
⑥ 市民社会の中での歴史資料のあり方についての研究

なおサポーター参加の方にも、学会会員や個人会員に送付していた、被災地の歴史文化や自然災害と歴史に関する様々な情報や、歴史資料ネットワークや参加各学会などの市民向けの講演会、見学会などの企画をお知らせするニュースレターを年４回送付させていただきます。また講演会や見学会など史料ネットの企画については、いち早くお知らせいたします。

加えて史料ネットは、サポーターや市民の方からの様々な歴史資料や地域の歴史についての問い合わせに応えるとともに、市民の歴史研究についても支援を進めていきます。お気軽にご相談ください。

歴史資料ネットワーク　総会と研究会「災害と歴史資料」の御案内

＊日時：2002 年５月 26 日（日）
＊会場：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
＊タイムテーブル
見学会：午前 10 時～11 時（同センター施設見学※要申し込み、下記参照）
総会：午前 11 時～12 時（改組の趣旨、申し合わせ、今年度の活動計画・予算・人事など）
研究会：午後１時～４時 30 分「災害と歴史資料－各地の史料（資料）ネットの活動から」
報告／藤田明良（史料ネット）小林准士（山陰史料ネット）久保隆史（資料ネット広島）
寺内浩（資料ネット愛媛：文書報告）
司会／佐賀朝、辻川敦　　研究会資料代／300 円
＊会場案内：所在地／神戸市灘区脇浜海岸通１－５－２　電話／０７８－２６２－５０５０
交通／阪神岩屋駅から南西徒歩 10 分、あるいはＪＲ灘駅から南西徒歩 15 分
※同センター施設見学には予約が必要ですので、参加をご希望の方は当方まで事前にご連絡下さい。
連絡・問い合わせ／史料ネット神戸センター　電話・ＦＡＸ 078-803-5565
（開室時間　月・水・木・金の午後１時～５時）

◎震災復興・市民歴史講座

震災復興・市民歴史講座の御案内改組後の歴史資料ネットワークは、中心的な取り組みのひとつとして、「震災復興・市民歴史講座」と題する新たな市民講座を実施します。この講座は、歴史研究の最先端を知らせていくとともに、震災を体験した市民と研究者が地域の歴史や文化遺産の活用について、意見交流する場にしたいとを考えています。内容も、被災地および周辺地域のさまざまな時代・分野の歴史とともに、震災復興をはじめとする今日的なトピックスなども取りあげていくつもりです。

2002 年度テーマ「未来につなげよう、地域の遺産」

第１回「震災後の発掘成果で変わる古代史像」（６月 16 日、下記に詳細）
第２回「よみがえる中世の国際港湾都市の姿」（９月中旬予定）
第３回「救出された遺産から明らかになる近世の地域史」（11 月中旬予定）
第４回「戦災と震災－歴史を記録し伝えるとは」（２月中旬予定）

第１回震災復興・市民歴史講座の御案内
「震災後の発掘成果で変わる古代史像」

震災後、復興工事に先だつ発掘調査が各地でおこなわれました。そこで得られた新たな考古学情報によって、神戸・西摂地域の歴史像がどう変わるのか。古代日本のなかで、神戸・西摂地域はどんな特色をもっていたのか。埋蔵文化財調査の第一線の担い手と、王権論のエキスパートが、阪神地域の発掘成果から、新たな古代史像を展望します。

＊日時：2002 年６月 16 日（日）午後１時～４時 30 分
＊会場：深江会館
＊講演：森岡秀人（芦屋市教育委員会）
「震災後の考古学からみた神戸・西摂の地域史像－古代の兎原郡を中心に－」
岡田精司（三重大学名誉教授）
「古代河内政権と西摂」
＊タイムテーブル
開会の辞：午後１時～1 時５分
スライド：「神戸・西摂の古代」午後 1 時５分～１時 20 分
講演１：午後 1 時 20 分～２時 20 分
休憩：午後２時 20 分～２時 30 分
講演２：午後２時 30 分～３時 10 分
ディスカッション：午後３時 10 分～４時 25 分
閉会の辞：午後４時 25 分～４時 30 分
＊会場案内：阪神深江駅下車南東徒歩１分（大日霊女神社境内）

なお、当講座のプレ企画として、３月 24 日、震災復興・市民歴史講座プレ企画「現代都市社会の歴史と課題～阪神・淡路大震災の経験から～」が開催されました。当講座のあり方、さらには史料ネットの今後の活動の方向性を見出す上でも、意義深いシンポジウムとなりました。

◎史料ネット主催「阪神・淡路大震災の資料保存と記録化に関する研究会」

（02/02/17 実施）

2002 年 2 月 17 日（日）、神戸大学文学研究科棟において「阪神・淡路大震災の資料保存と記録化に関する研究会」（以下「研究会」）が行われました。この研究会は、これまで実施されてきた、被災資料保存の必要性を広く市民に知らせていくフォーラムとは別のかたちで、災害の歴史を記録し活かしていくことの方法・意味を、幅広い研究者や市民団体の方々と改めて議論する場として開かれたものです。この趣旨にある通り、奥村弘氏（歴史資料ネットワーク代表幹事・神戸大学文学部助教授）を司会に、岩崎信彦氏（神戸大学文学部教授）、室崎益輝氏（神戸大学都市安全研究センター教授）、室崎研究室の震災犠牲者聞き取りプロジェクトメンバー、菅祥明氏はじめ震災まちのアーカイブのメンバー、矢守 克也氏（奈良大学社会学部助教授、阪神・淡路大震災語り部グループ 117）、蘇理剛志氏（総合研究大学院大学博士課程）、山本唯人氏（一橋大学大学院社会学科研究科）、寺田匡宏氏（国立歴史民俗博物館 COE 研究員）、笠原一人氏（京都工芸繊維大学工学部助手）、佐々木和子氏（阪神・淡路大震災記念協会）、辻川敦氏（尼崎市地域研究史料館）ら（順不同）の参加がありました。様々な立場で活動している方々が集まり、活発な討論が交わされたと言えます。

研究会はまず、それぞれの立場からの資料保存とそれを記録すること、について意見が述べられ、その後質疑応答・意見交換が行われましたが、その中で特に話し合われたのは、それぞれの立場での活動を通じての課題は何であるかということと、それをいかに引き継ぐかということです。具体的には、震災被害者聞き取り調査の中で困難があったことや集まった資料の整理が時間的な理由、様々な制約などの理由で一筋縄ではいかなかったことなどがあげられました。それに加えて、2001 年 4 月 27 日に 1 期施設オープンが予定されている「阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター」に関連しても意見が交わされ、そこでの資料の公開とそれを市民がいかに活用するかなどが議論になりました。

最後に、研究会が恒常化することを目指してこれからも活動し、意見を交わしていくことを確認して議論を終了しました。

立場も活動内容も異なる方々が集まって意見を交換したので、資料保存の問題点や、市民が資料を活かすための課題など、資料保存の様々な見方を共有することができ、大変意義深いものになりました。直面している課題を共有することで、次のステップ＝震災の記録から震災の記憶を次の世代に残すということのために何をしなくてはならないかを考えなくてはいけない、という認識が改めて得られたと思います。

（文責：深見貴成／ふかみ　たかしげ／
神戸大学大学院文学研究科）

当研究会には、幅広い立場からの参加者を得、さまざまなご意見をいただくことが出来ました。そこで、参加者のおひとり、一橋大学大学院の山本唯人氏からお寄せいただきました、「戦争（空襲対策）と防災」というご自身の研究テーマの視角からの当研究会及び「資料保存」のあり方に対するご意見を紹介します。

「記録の戦後史」があるとしたら

～史料ネット第 1 回研究会に参加して～

山本唯人

2 月 17 日、辻川敦さん、まちのアーカイブの寺田匡宏さんに声をかけて頂いて東京から、史料ネット主催の研究会（第 1 回）に参加しました。私は、震災直後、救援に訪れて衝撃を受けた経験があり、それから数年後、まちのアーカイブに出会って「震災の資料保存と記録化」というテーマのあることを知って以来、このジャンルに関心をもちつづけてきました。まちのアーカイブ主催の読書会に参加したり、機関誌『なまず』に寄稿するなど、いくつかの場所でこのテーマに関する発言もしてきました。

今回、おそらくただひとりの東京からの参加者であったことと、わたしの研究上のテーマが「戦争（空襲対策）と防災」であること、その関係でここ数年、東京空襲犠牲者の氏名記録の運動に関わってきたというやや特殊な立場から発言させて頂いたので、ここでも、総括的な「参加記」ではなく、あくまでそういう私の立場から見た研究会の印象を述べてみたいと思います。

＊＊＊

ひとつは、「資料保存」というテーマがもつ技術的な側面と運動的な側面とのダイナミクスがもつ魅力をどうひきだし、整理していくかということです。

私が、数年前はじめて、まちのアーカイブの活動に触れたとき「資料保存」という営みそれ自体が、これほどの深さをたたえた「運動」でありうることが何よりも新鮮でした。それぞれの個人のなかで、脈動するものによりそいながら、「外部」から関わるものにも共有しうる「距離」をもっている。私にとって「資料保存」とは、事象に「内在」すると同時に「開かれて」いる、内部／外部のインターフェイスに存在していてくれる、特別な意味をもつ運動でした。

しかし同時に、「資料保存」という行為は、歴史研究者にとっては「研究体制」のなかに組み込まれた日常的な作業の一部でもあり、やりようによってとめどなく「技術的な問題」として処理できてしまう傾きをもちます。「膨大な震災資料をどうやって利用可能なアーカイブにしあげていくか」というテーマ自体を「現代的な問題」として主題化する意義は十分認めつつ、しかし、少し離れたところから見ている私としては、「資料保存」という営みこそがもちうる「インターフェイス」としての役割、「距離」を置くからこそ「深く」入っていけるという逆説的な機能、「外部」からあるいは「事後的に」関心をはらう人間にとっても「開かれた」交流の場であることを強く期待したいと思います。

とするなら、今後、参加者全体がひとつのテーマを決めて、そこへ向かってとりくんでいくというアプローチではなく、あえて、統合的な視点をおかず、もっと参加グループ・個人の活動とそこから見えてきた成果の報告にフォーカスし、それに対する、ときに参加者個人の価値観のレベルまでふくめたコメント、ディスカッションというかたちで運営される会があってもいいと思いました。というのも、「震災資料」とは、多かれ少なかれ、震災を体験した個人の社会的な位置や情念のようなものが張り付いたものであり、そこを切開し公共化していくことぬきでは「震災とは何であったのか」というような問いがリアルで切実なものにはなりえないであろうこと、また、資料ネットのみなさんは十分に意識しながらそのような作業をするだけの信頼感を育ててこられており、それこそが、「神戸」に誕生した資料保存活動の貴重な財産でありアドヴァンテージであろうと思うからです。

そうしたより広い視野から見ると、メモリアルセンターの問題については「是か非か」というレベルに、やや悪い意味で引きずられすぎのような印象もありました。メモリアルセンターは、たしかに「震災資料」の問題を外面的な圧力により集約してしまう側面をもつことはその通りだと思います。しかし、そもそも、それに対してみなさんが「いい」とか「悪い」とか言いあっている判断の基準自体はどこからくるのか。あるいは、すでに共有されたものがあるのかもしれませんし、簡単なことはいえませんが、飛び入りで参加した私には、みなさんが判断の「手前にもっているもの」をもっと知りたいと思ったし、そのあたりを可視化する努力こそがだいじなのではないかという思いが残りました。

＊＊＊

もうひとつ、印象的だったのは、笠原一人さんから提起された「表現」をめぐる問題です。

「資料保存」の問題は、「記憶の継承」というテーマと表裏一体の関係にありますが、本来かたちのない「記憶」や「体験」を伝達するためにはかならず「表現行為」という媒介をくぐらなければなりません。いわば、「記憶」は「表現」というメディアにくるまれるだけでなく、「表現」というメディアによって、伝達すべき内容自体を大きく規定されている。このように捉えるとき、笠原さんのいう「表現」の問題は、狭義の建築表現の域を超え、「資料」そのものや、震災体験をかかえて漂流する無数の「生き方」そのものをも包括する根源的なテーマであることが分かります。

ではこれまで、「震災」を語る言葉たちが、どれだけこの「表現」の問題に自覚的に、「阪神大震災」を伝えるにふさわしい「表現」を模索してきたか。

もし今わたしたちが「震災」を語る言葉にもどかしさを感じているとすれば、問いは私たちの言葉を規定しているボキャブラリーそのもの、いわば、都市に暮らすわたしたちが「危機の体験」をかたちづくるために実践し／されつづけてきた「記録の戦後史」とでもいうべきものを相対化する作業へ展開していくはずです。そのように考えるとき、「震災体験の継承」について考えるこの場には、実は、意識するとしないには関わらず、この震災にまでいたる無数の歴史的出来事の記憶が呼び返され、響きあっていると思われます。戦後、都市の出発点に刻印された大空襲の記憶から、それ以前の水害、あるいは、関東大震災、あるいは、水俣まで-。「記録の戦後史」を構成してきたボキャブラリーすべてがこの場に呼び返され、可能性を試されているのです。

その意味で、私が静かに感動していたのは、この研究会を通じて、辻川敦さん、佐々木和子さんなどそれまで名前を知るのみだった「戦災記録」の先輩たちと

出会うことができたということです。それは見たところまだ「埋もれた伝統、系譜」であるかもしれません。しかし、阪神大震災における「表現」の問題を、「記録の戦後史」をどう乗り越えていくかというパースペクティヴからとらえたとき、そのことは、神戸においてはじめて提起された「震災資料の問題」の大きな可能性として現れるはずだと信じてやみません。「震災資料」はこれからやってくる「未来」だけではなく、消えていった無数の「過去」からも願われているのです。

（やまもと　ただひと／
一橋大学大学院博士課程、社会学）

◎阪神・淡路大震災記念協会見学会　（02/02/27 実施）

2 月 27 日（水）、阪神･淡路大震災記念協会がこれまでに収集した震災資料のミニ見学会を、有志の呼びかけで実施しました。4 月の「人と防災未来センター」開設をひかえ、記念協会が数年間にわたって実施してきた震災関係資料の収集成果を、歴史学会関係者などが一度、自分の目で見ておく機会にしたい、という趣旨で、大阪歴科協の委員会や史料ネット関連のＭＬメンバーに呼びかけて少人数で見学するというものでしたが、予想以上の参加があり、15 名ほどの方が集まりました。

JR 神戸駅から歩いて 1 分ほどの神戸クリスタルタワー11F にある記念協会に 10:00 に集合、まず協会の会議室で、資料収集を担当してこられた佐々木和子さんから協会での資料収集事業の概要についてレクチャーをいただき、同席した芝村篤樹さん（桃山学院大学、震災資料公開基準検討部会座長）からもコメントがありました。

当初は、佐々木さんら専門の調査員が細々と収集を行っていく方針だったものが、雇用交付金事業と位置づけられることによって 100 人以上の調査員を半年ごとに雇って大規模に収集を行う形になったという経過、そうして雇われた調査員への調査方法の説明や調査実施過程でのさまざまな苦労や問題点、そして、そうした事業によって収集された震災資料の、質・量ともに充実した性格、資料の保管方法や目録・検索システムの特徴などなどについて､佐々木さんから説明がありました。芝村さんからは、この事業が持つ性格について、①現在進行中の事態についての一次史料を中心にした資料収集であり、それを同時進行的に公開・利用していこうとしている点、②集めている資料の量と質、形態や出所などの多様性、③雇用交付金事業による大規模な収集・調査体制、などの点で歴史学や史料調査の歴史においても、類例のない画期的な意味を持つものであることが強調されました。

その上で調査員のみなさんの作業場と資料の保存スペースを兼ねたフロアを見学、またそれとは別室になっているまちづくり協議会関係の資料収集などを担当する部屋や図書資料の書庫などもご案内いただきました。

雇用交付金による 100 人以上の調査員体制が終了間際ということで、それでも 50 人以上の調査員の方々が資料整理や目録入力などに取り組んでいる様子は壮観でした。専門性と経験の積み重ねが重要な意味を持つ資料調査収集担当者が、6 ヶ月期限でしか雇えないなど、雇用交付金事業そのものには様々な制約や問題のあることは確かですが、このような形で大規模な調査が行われたことはかつてなかったことですし、震災資料の収集という事業にこれだけの人が関わるということ自体が、小さくない意味を持っているのでは、と思いました。また収集された資料の中でも、被災地各地域でのまちづくり協議会関係の文書は、収集の件数や量、その体系性などの点で、特に興味深いものでした。

見学はお昼過ぎには終了しました。短い時間でしたが、あらためて震災資料の調査・保存が、歴史学や史料保存にとって持つ意味の大きさを感じる機会となりました。

史料ネットとしては、こうした事業の成果が新たに発足する人・防災・未来センターでも引き継がれ、活用されていくよう働きかけを続けていきたいと考えています｡歴史学や史料保存に関わる、できるだけ多くの皆さんが、震災資料保存問題に関心を寄せ、この活動に参加・協力してくださることを期待しています。

（文責：佐賀朝／さが　あした／
桃山学院大学経済学部）

参加記～記念協会の経験を学会の共有財産に！　　森下　徹

阪神･淡路大震災記念協会を実際に訪れてみて、活動の内容と規模、そしてその質に圧倒されたというのが率直な感想である。記念協会は、被災 10 市 10 町を対象として、震災に関わって現在も生みだされつつある、同時代の多種多様な資料についての所在調査、収集、整理・保存、公開・活用を、同時並行ですすめている。こうした活動は､おそらく日本でも世界でも初めての経験ではないだろうか。以下、２、３の点について感想を述べたい。

史料ネットの活動の中でも、また自治体史の仕事に関わる中でも痛感したことだが、新聞や雑誌、印刷物、写真などの近現代資料は､「歴史資料」として認識されていないケースが多い。ましてや同時代の震災に関わる「資料」を、地域住民に「歴史資料」として認識してもらうには、そう簡単ではなかったのではないかと思われた。また、同時代の資料であり、また再開発事業など権利関係の資料も多いことから、資料の公開などプライバシーについてもいろいろ困難な問題に直面したのではないだろうか。

記念協会では、被災者・地域住民に対するチラシや調査員用のマニュアルを作成し、対象となる資料や資料保存の歴史的意義をわかりやすく伝える工夫が随所になされていた。プライバシーについても、プライバシーへの配慮と資料の公開・活用を両立させる様々な知恵が感じられた。こうした努力の甲斐もあったのであろう、地域住民から記念協会の活動に対するクレームなどはほとんどないという。また、資料の公開についても、8～9 割の方が公開を承諾しているという。そこには､「震災の経験を後世に伝えたい」､「資料を活用してほしい」という、被災者・地域住民の歴史意識・震災観の一端が表れているようで、非常に興味深く感じた。

以上はほんの一例だが、記念協会の活動とそこで蓄積された経験から学ぶべき点は非常に多い。近現代史の史料調査や聞き取り、フィールドワークにはもちろんだが、記念協会には、前近代史の調査にも活用できる多くの経験が蓄積されていると思う。しかし､せっかく蓄積された経験やノウハウが、新しくできる防災センターには必ずしも十全には引き継がれないらしく､まことに残念なことである。せめて歴史学会では、この貴重な経験を、学会共有の財産とする必要があるのではないだろうか。

（もりした　とおる／大阪歴史科学協議会研究委員）

◎富松城跡を活かすまちづくり委員会による、第一回学習会開かれる

尼崎は富松にある、市街地の貴重な中世城郭遺構、富松城跡が、現状のまま存続できるか微妙な状態にある。土塁跡の残る富松城跡地はもともと個人の所有地であり、阪急塚口駅と武庫之荘駅の北側中間に位置するという、宅地開発のうえでも好個の場所に立地している。しかしながら、所有者の方をはじめ城跡を愛する地元の皆さんの熱意により、開発されることなく今日にいたるまで伝えられてきた。それが、所有者の方の相続に伴い、相続税として国に物納せざるを得なくなり、現在は財務省神戸財務事務所の管理下にある。３月 19 日付けの朝日新聞阪神版によれば、同財務事務所はこの物納された遺跡地について「市教委に改めて話を聞いた上で、どう処分するか慎重に検討したい」としている。

こういった状況に鑑み、富松城跡の価値を広く認知してもらい、保存問題への関心を高めようと、地元の皆さんが中心となって富松城跡を活かすまちづくり委員会がつくられ、以下のような催しが開催された。

第１回　富松城跡を学ぶ学習会
「富松城の攻防・そのとき京を動かした～富松城跡はどれほど貴重か～」
主催：富松城跡を活かすまちづくり委員会
場所：西運寺（富松町２丁目）　　日時：2002 年３月 30 日（土）午後１時～４時 30 分
内容：講演／下中俊明氏（城郭談話会）
「中世の城・富松城はどんな城？～富松城はどれほど貴重か～」
パネルディスカッション／コーディネーター：川口宏海氏（大手前大学教授）
下中俊明氏（城郭談話会）善見壽男（富松城跡を活かすまちづくり委員会代表）
現地見学

当日は 186 人におよぶ参加者があり、進行役の川口宏海氏がマイクを片手に会場を飛び回っての奮闘もあって、大盛況であった。主催者の「富松城跡を活かすまちづくり委員会」では、来る６月にも、さらに大々的に第２回学習会を開催するということであるので、歴史や文化財保存に関わる、多くの皆さんの参加・協力を期待したい。
今回、主催者のひとりである善見壽男氏の談話と、参加・協力者のひとりである埋蔵文化財の専門家、山上雅弘氏による参加記をお寄せいただいたので、紹介する。なお、来る６月８日（土）には、下記のとおり第２回学習会が開催される。参加希望の方は、富松城跡を活かすまちづくり委員会までお問い合わせ願いたい。

まちづくりシンポジウム第２弾　「戦国の城・富松城の実像に迫る」

平成 14 年６月８日（土）
第１部　富松城跡現地見学会　午前 10 時富松神社集合
第２部　午後１時より　於尼崎北小学校体育館
講演　益田日吉氏（尼崎市教委学芸員）「富松城跡を掘る」
仁木宏氏（大阪市立大学助教授）「富松城跡はどこまで復元できるか」
シンポジウム　善見壽男氏（まちづくり委員会）、川口宏海氏（大手前大学教授）

主催・問い合わせ先　**富松城跡を活かすまちづくり委員会**
〒661-0003　尼崎市富松町 2-23-1 富松神社（善見壽男）TEL 06-6421-5830

善見壽男氏談話

富松城跡は、文化財指定を受けていないとしても、地域の歴史的な遺跡・文化財として、十分価値のあるものだと思う。相続税の納付にあたって物納が認められたということは、財務事務所もその文化財的価値を認めて受け取ったのだと理解している。今後は、国も、その高い文化的価値をより大きく認め、それにふさわしい扱いをして欲しいと期待している。

この遺跡は、尼崎や阪神地域の戦国時代の歴史を伝えるものであり、その土塁を見ることが、歴史を学ぶきっかけになる。壊されてしまえば、当時の姿を知るよすががなくなってしまうし、写真では実感を伝えられない。だから、この遺跡を次の世代のために残して行きたいし、多くの市民や研究者の皆さん、とくに次の時代を担う学生さんたちや子供たちに、自分の目で見て理解し、その姿を確かめて欲しい。遺跡が残れば、今歴史を学んでいる学生さんがいずれ大人になり、研究者となったときにも、後輩や教え子たちに戦国時代について教える際、「あの富松城を見に行って来い」

と言えるはずだ。

富松城跡にこめられているのは、他に変えられない地域の歴史の姿だ。城跡をはじめ、この地域に多くの歴史・文化財のストックが伝えられてきていることが、今の富松の雰囲気を醸し出している。その核が失われてしまうのはしのびないと思って、取り組んでいる。

今後とも、多くの皆さんのご支援・ご協力をお願いしたい。

（よしみ　ひさお／ 富松神社宮司／文責・編集部）

富松城を学ぶ学習会参加記

山上雅弘

富松城の土塁保存活動を行ってこられた地元住民の方々が、この 3 月 30 日に「富松城を学ぶ学習会」（第 1 回）を立ち上げられたので私も参加させて頂いた。学習会は近年開発の危機に晒されている富松城の土塁について考えるために行われたもので、住民自らが企画・運営を行う市民運動として開催された。主催者の意図は中世居館について専門的な知識を得ることと、広く富松城に関心を持ってもらうことの２つであるが、今回の主眼は前者に比重が置かれていたと私は思う。つまり守るためには自分たちがしっかりと遺跡自身について知っておきたい、という気持ちが前面に出ていたと私は感じた。その気持ちは富松地区の人たちが、これまで見守り続けた土塁の将来に対する強い思念があってのことであろう。

当日の会場は富松にある西運寺というユニークなもので、その中に参加者 180 人余りが入り立錐の余地もない大盛況となった。参加者の半分以上は富松地区の方であるが、地区周辺の方も少なからず混じっていたとのこと。これは地元のＦＭテレビや新聞社への広報もしっかり行われた運営委員会の努力の賜物と言える。

さらに会の中心的存在である善見壽男氏（富松神社宮司）からは「この活動を単に土塁を守るためのものとするのではなく、地域作りの中で富松にとって土塁が必要」という発言があった。この言葉に、保存運動が単なる熱意だけでなく、しっかりとした視点を持ち合わせていると感じた。さらに氏の「多くの参加者を招いてオープンな会にしたい」という考えも、この種の運動が陥りがちな独善とは一線を画したもので、これらの発言が聞けただけで、私は参加してよかったと思った。

ところで富松城といえば“土豪居館”、というイメージが強いが、土塁の規模は基底部幅 10m、高さ 4m と雄大なもので、山科本願寺や伊丹の有岡城跡の土塁と比べても遜色がない。当日改めて実見して見ると、ほんとうにこれが土豪居館の土塁という評価でよいのか、疑問が湧いた。考えてみるとこの城は細川両家の争奪の場となった時と、有岡城攻めの陣となる時のみ城として登場する。その一方、富松を拠点にした土豪・国人の存在は現在のところ知られていない。このため在地の居館というよりは広域戦の際の拠点城郭的なイメージの方が正しい気がした。この雄大な土塁が語るものは、土豪居館よりもさらに大きな役割をもち、より軍事的な城の姿ではなかろうか。

しかし、平城の土塁残存遺構は、そんな機能上の軽重は抜きにして、今ピンチである。兵庫県内全体の城跡をかき集めても（かなり残りの悪いものも含めて）なんと 10 数箇所を数える程度しか残されていない。県内では播磨の坂本城（姫路市）、淡路の養宜館（三原郡三原町）などが有名だが、これらは守護居館の周囲を囲んだ土塁として全国的にも知られた存在である。しかし、これらとて坂本城の土塁主要部が平成１１年 3 月に発掘調査を終えた後に消滅してしまった。このように、貴重なはずの土塁が人知れず姿を消しつつあるのが現実である。

現状ですべてに恒久的な保存措置が取られたとしても、もはや充分とはいえないが、せめて現存遺構は何とか死守したいと思うのが、この時代に生きた研究者の 1 人として切実な願いである。現状は厳しいが、救いはこの地区の人たちの熱意と、未来を見据える理性的な姿にある。我々研究者も彼等とともに自分たちの役割を見つめなおし、後世に嘲笑されない行動をとりたいと思った。

（やまがみ　まさひろ／城郭談話会）

◎被災・保全史料「尼崎公害患者・家族の会史料」本格整理はじまる

阪神・淡路大震災直後にレスキューされて尼崎市立地域研究史料館に収蔵され、その後尼崎戦後史聞き取り研究会有志により仮整理が行なわれた尼崎公害患者・家族の会史料が、このほど原所蔵者自身による本格的整理保存がなされることになり、去る 2002 年３月 11 日、尼崎市立地域研究史料館より返却された。

具体的に整理作業を行なうのは、尼崎南部再生研究室。同研究室は、尼崎大気汚染訴訟が和解したことを受けて、南部地域再生に向けた調査研究や、公害以前の原風景発掘、公害および反対運動の歴史の記録化などに取り組んでいる、公害患者・家族の会と連携関係にある組織である。

この研究室が史料を引き取り、訴訟団の裁判史料とあわせて整理保存し、記録作りにも取り組むことになった。訴訟団事務局長を務めてきた村松一さんと、尼崎戦後史聞き取り研究会の井上眞理子さんが、これら史料の整理に中心となってあたる。

これより先、尼崎市の隣の大阪市西淀川区に本拠を置くあおぞら財団・公害地域再生センターにより、西淀川公害および大阪地域の公害史料の整理保存や、全国的な公害関連史料保存に向けた取り組みがなされていきている。尼崎の取り組みもまた、この分野に新たな成果を付け加えるものとなろう。

＊＊史料ネット　ニュースレター購読のお願い＊＊

歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き、ニュースレターを年４号発行します。改組とともに今後内容をさらに充実させる努力を重ねて参ります。つきましては、年間購読料を 1000 円に値上げさせていただき、引き続き購読を受け付けます。

しかしながら、冒頭でもお知らせしましたように、読者のみなさまには、ぜひとも入会ないしサポーターになっていただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力くださるようお願い致します。

＜史料ネット郵便振替口座＞　（変更になりました。ご注意ください）
名義：歴史資料ネットワーク　　口座番号：００９３０－１－５３９４５

■□■

＊このニュースは、ＮＩＦＴＹ－Ｓｅｒｖｅの歴史フォーラム・歴史館２番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。

＊史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
http://www.archivists.com/ または http://member.nifty.ne.jp/archivists/
または http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/

■□■

史料ネット NEWS LETTER No. 28　　2002.5.8（水）
編集・発行　歴史資料ネットワーク　〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1
神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565
e-mail s-net@lit.kobe-u.ac.jp　（アドレスが変わりました）
URL：http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/welcome.html

PDF version